

一九五〇

八月二十四日 木曜

午後二時三十五分アムステルダム飛行場発。四時十分パリ着。税関は実に簡単だ。両替所で五十ドル替える。一万七千何フランか貰つて急に金持になつたような気がする。両替するのをバスの案内人が待つていてくれる。エール・フランスのバスに乗ると直ぐに出る。これがパリの郊外か。しばらくそういうふ所を通るとやがて賑かな町へ出る。凱旋門が見える。エッフェル塔も見える。エトワールの廣場をぐるっと廻つて、間もなくセーヌ河を渡りエア・ステーションへ着いた。

早速案内所へ行つて宿を世話して貰う。コンフェレンスで来たのだが、日本の学者は金持でないんだから高くない宿を世話してくれと頼む。「パ・シェール、メー・パ・マール」という取つておきのフランス語を使つたりした。それからソルボンヌに用があるからクワルティエ・ラタンにして貰ひたい、それに大きいホテルは嫌いだから小さいのを頼むと勝手に並べる。若い男の案内人が笑いながら電話帳だかホテルの名簿だか繰つて電話をかけてくれた。そうして「ブールヴァール・ドゥ・ポール・ロワイヤール、四八、オテル・スニイ」と紙に書いてくれた。タクシーはあそこへ頼めばよいと教えてくれる。

タクシー受付へ行つて書付を見せて頼むと「トロワ・サン・フラン」という。フランスの金の勘定にはさぞ難儀することだらうと内心びくびくしていたが、これは一聲で分つたので少し得意になる。今空港で両替して来たばかりのフランスのインフレ札を沢山持つてゐるから三百フラン耳をそろえて出す。フランを円と思へばよいのだから勝手がよい。何分かかるか知れないが、三百フランなら東京と同じ見当だ。フランスの物価がよく分らないので、アムステルダムで合つた教授に少しきいてみようかと思つたが、そんな暇がなかつた。それで用心のため宿もなるべく安いのを取ることにしたのである。

オテル・スニイときいて何となく「ジエニイの家」を連想した。フランソワーズ・ロゼーのような妖しくも美しい小母さんでも出て来たら逃げ出すほかはあるまいなどと下らぬ空想をしながら車に収まつていた。やがてポール・ロワイヤール街を走つて、町名を書いた札が車から読めるのだ。ポール・ロワイヤールの僧院を想ひ、何となくパスカルを想う。

間もなく着いた。なるほど小さなホテルだ。閑静らしい。出て来たマダムはロゼーのような人ではなく、てきぱきした威勢のいい小柄の人だった。部屋をとこうと「サンク・サン・サンカント・アベック・バン、キャトル・サン・サンカント・サンバン」という。実はこれは一と言では分らなかつたのだ。思はず首をかしげるとすぐ紙へ書いてくれた。むろん風呂つきがいいという。五五〇フランなら安いものだ。一人しか乗れない小さなアサンスールで六階まで昇る。このうちの最高階だ。エレベーターのすぐ前の三〇という部屋へ案内する。入つて見ると大きな部屋だと思って驚いたら、入口から丁度対角線のところに大きな鏡があつて部屋の像を作つていることは、もう一人の自分が此方を見ているので分つた。窓際へ行つてみるとパリの南の方が一瞬のもとに見える。「セ・ビヤン?」ときく。「トーレ・ビヤン」と言わざるを得ない。通りは大体東西でホテルは北側、この部屋は南向きだ。わるくない。よく見ると書き物机も椅子もアルルのファン・ホッホの部屋にあつたくらいの粗末なものだし、敷物はだいぶそれでいるけれども、自分のうちのことを思えばぜいたくは言えない。その上金筋のついたボーアなどいなくて、僅かの女中くらいで小ぢんまりやつてゐるらしいのが気に入った。これに定める。

そしたら今夜の分を払えという。数日滞在するのだがと言つたら「ス・ソワール」という。そこで一千フランの札を出す。年増の女中らしい黒っぽい洋服を着た人がお釣を持つて来て、エトランゼーだと思つて百フラン札一枚一枚と並べるから「分つた、僕は数学者なんだ。」と言つたら笑つた。マダムも笑つた。パリへ来ただけで心がこれだけほぐれたのだ。トール・フランスで勝手な注文をしたのも既にそれだつた。

その前に宿帳を書いた。職業のところへプロフュッスールと書いたら「プロフェッスールか」と言つてマダムが心持ち目を丸くした。そうでなくとも田のくるりとした可愛いマダムだ。ピンク模様の洋服を着た三十ちょっと位の人だ。ひどく見すぼらしいプロフェッサーだと思つたのかも知れぬ。

朝飯はここで食えるのかときいたら「飯はレストランへ行くんだぞ、セッサ」という調子に聞えた。とてもきびきびしたマダムだ。なるほどホテル・レストランでないことは入るとき気がついた筈だったのだ。何しろ風呂つきで五百五十フランとは有難い。早速垢を落してシャツでも替えて夕飯を食いに出かけようと思ひ、湯の栓を捻つてみたが水しか出ない。六階の暫く使わなかつた栓だからお湯が出て来るのに暇がかかるのかと思つて出してみるが、いつまでも水だ。お客様が少ないのでこれからわかるのかなと思い、あとにした。少し休んでいたつむに七時になつたから夕飯を食いに出る。

左へ少し行けばアヴェニュ・デ・プロランとブールヴァール・アラゴーの辻へ出る。

アラゴー通りというのが気に入ったから、そっちへ少し行くとレストラン・アラゴーという小さなうちがある。これが気に入ったから入る。テーブルが六つ七つしかなくて娘さんが一人で働いている。甚だ気軽でよい。メニューを読むのに手間どつていると、メロンを食うかというから「ウイ。」シャトー・ブリアンはどうか」とこののでこれも「ウイ。」「ペー、こんなに厚いんだと手真似をしてみせる。」ボワール?」には「ヴァン、ブラン」と答える。そうして棒を切つたようなパンを食つ。それから「コーヒーを呑んで三百フランばかりだから思つたより安い。

エール・フランスで貰つた地図を見ると、アラゴー通りの延長のブールヴァール・サン・マルセルを少し行くとセーヌ河へ出ることが分る。八時少し前でまだ明るい。そつちの方へ歩いて行く。高架線に突き当つて左へ行くと河岸へ出た。橋の中程まで行つてふと右の方を見ると十二三日の月が三段ばかり昇つてゐる。おおセーヌ河。左の方を見るとノートルダムの尖塔が見える。しばらく其処に立ちつくした。やがて橋を渡り切つたが、今日はこのくらいにして帰ろうと思ひ引返す。暫く歩いているとさつきと様子がちがつてゐる。考えてみたら往きに高架線へ突き当つて少し左へ曲つたことを忘れて、帰りに真直ぐ歩いていたのだ。少し戻つてみるとさつきの通りがあつた。

宿へ帰つてバスを試みる。依然として水しか出ない。これは安いホテルのせいかな、それともまだ八月だからパリではヅーシュかなと思う。水でもまだ冷くはない。体を洗つてさっぱりした。アムステルダムからの垢を落した。

部屋の電灯が少々暗い。これも安いからかな、それともフランスがまだ楽でないせいかな。しかしベッドの上の電灯は明るくて気持ちがよい。何か読むのには持つて来いだ。これは実際的でよい。新聞を読み、またパリの地図を見る。

八月二十五日 金曜

昨夜はパリを見た興奮か知れないがなかなか寝つかれなかつた。さすがにパリだ、夜中の三時頃口笛を吹いて歩いている男がある。三時頃月が沈むのが窓から見えた。窓のカーテンを半分だけしめて半分残しておいたのだ。

七時半に起きた。書き物机の椅子は木ばかりでクツショングついていないが、別に肱かけ椅子がある。八時少し過ぎ洗濯物を頼み今日の家賃を払つて朝食を食いに出かける。毎日払うのは間違いがなくていい。アラゴーはまだ開いていないらしい。昨夜歩いたサン・マルセル街へ出て何処で朝食を食つたものか物色してたらオルレアン駅前まで来てしまつた。そこにキオスクがあるので切手をきいたら、あそこのビューロー・ドウ・ポストへ行けといふ。その前にレストランがあるから腰をかける。三日月パンをのせた皿を持って来たからコーヒーを頼む。「オー・レー」ときく。「ウイ。」それからパンを追加して行つた。ここは往来を眺めたり、駅から出て来る人を見物していると面白い。金

を払おうとすると「三つ食つたか」ときく。「ウイ」と答える。食つただけ払うのだから気が楽でいい。残したのは持つて行つて新しいお密のところへ出し、それに新しいのを追加するのだからあつさりしていいこれもいい。

さつきキオスクのおばさんがあつちに郵便局があると言つたので、ギャルソンにきてみる。直ぐに分つた。うちへ航空便のはがきを出す。帳面をしらべて六十フランだといつ。「れなら間違いなく届くだろ?」アムステルダムでは郵便局がなかなかないので、キオスクで切手を売る婆さんにきて貼つたので日本へ行く航空便には足りなかつたらしい。

それからセーヌ河を渡つて北岸へ出る。河岸を歩いていると船の塗り替えをやつ正在のが見える。婦人がペイントを塗つている。婦人も働いているのである。その船室にはきれいなテーブル・クロスのかかつた食卓が見える。食事をするところは人間生活の中で最も大事な場所の一つだ。そこがきちんと、そうしてきれいになつてゐるのは美しいものだ。

ポン・ルイ・フィリップのあたりから古本屋の箱が見えて來た。道端のコンクリートの土堤へコの字を横にした形の金具を上から挟み、これに箱が取りつけてある。箱は奥の方が丈が高く上が勾配になつていて、これを蝶番で開くと中に本が並べてある仕組だ。まだ朝が早いせいか開いてあるのはちらほらだ。多くは閉ぢて鍵がかかつていて、してみるとこれはみんな置きつ放しにするのだらう。今將に店を開かうとしているところもある。開いているのを覗き込んで行つたら一三軒の三十フランと区切りをした一画の中にアムペールの「日記及び書簡」という小型の本のあるのが直ぐ目についた。背革で文字のところは濃いブリュー、文字は金である。手にとつてみるとアンドレ・マリー・アムペールだから間違いなく物理学者のアムペールだ。一八七三年のものである。こんなのが三十フランの一画の中にあるとは思いも寄らなかつた。名にし負うセーヌ河畔の古本屋だけのことはあると思つて感心した。早速買ひ取つた。まだほんの一三軒しか見ていないのにたいした獲物だ。しかしこの調子でいい本が見つかつたら困ると思い。みんな三十フランならいいが、そもそも行くまい。そつすると相当の金になるかも知れない。それも困るが、荷物が余りふえると飛行機の超過料金をとられる」とになる。悲喜交々到るという形だ。

今日はルーヴルへ行こうと思つて出かけて來たのだ。一ついい見つけものをしたのに満足して、本屋はまたこの次ということにしよう。そつと思つて美しい橋やシテの島を眺めながらマロニエの並樹路を歩く。実によい気候だ。少しも暑くない。

やがてルーヴル宮殿のところへ出た。美しいコロナードを見て東のアーケードを入り、中庭を横切る。もう一度アーケードを潜ると左手に入口がある。三十フランで入場券を買う。広い絵はがき売場があるが、それは絵を見てからのことだ。目録もあとだ。よく目録の校正でもするように見ている人があるが、自分は手ぶらで見る流儀だ。もつともさつき買ったアムペールは大事に手に持っている。目録はあとから見て、そうして実物を思いかえすのが好きだ。

先づローマの彫刻、それからギリシアのものを見る。サモトラスの勝利は実に印象的な置き方がしてある。アテネのアクロポリスに立っていたパルテノンのフリーズがある。上の方が欠けているけれども典雅なものである。ギリシアの学者の首がある。前と後へ別の人々の首を彫刻したのがある。やがてミロのヴィナスがあつた。これは特別の場所に飾つてあって、周りをゆつたりと取つてある。ぐるっと廻つて、また遠く近く自由に見られる。美しい顔をしている。更に古代のものが沢山ある。エジプトの象形文字のついたものがある。これを解読するのに苦労したシャムボリオンのことをちよつと思う。スフィンクスの置いてある部屋がある。小さなピラミッドもある。これらは専ら歴史的興味に属し、芸術的感興を余りそるものではない。しかしその歴史的興味夫自身を追求することになれば、それはまた面白いことに違ひない。それはやるとすれば別の日になつた方がよさそうだ。一わたり見廻していよいよ絵の方へ行く。絵を少し見てからアポロンの間へ入る。ここには王冠だの宝石だの、そういうものが置いてある。豪華な細長い部屋で天井には絢爛たる装飾がしてある。ここは十一時から一時まで閉じると書いてあつたので、早く見ておくことにした。

その隣りの四角な部屋にヴェラスケスなどがある。その向こうに特に有名な長い画廊が見えて来た。レオナルドはあそこだなと思ふ。そこへ行く前にその横丁の部屋を見る。オランダ派はアムステルダムでいぶ見て来たから、ああかういうのかといつ気がする。それからいよいよ大ギャラリーを見る。ラファエルやレオナルドを見る。複製で見てゐたの本物を目の前に見る。ラファエルの人物はいい顔をしている。レオナルドのモナ・リザはだいぶ変色してゐるといふことであるが、とにかくあのルネッサンスの天才の作品を飽かず眺めることができる。モナ・リザの真正面に書架を据えて模写しているお婆さんがいた。それには関はず自由にレオナルドを見に行つたら、婆さんがちらと俺の方を見た。お婆さん、もしレオナルドが見たら、その色はもう變つてゐるんだよ、と注意してくれるかも知れませんよ。

それから十八世紀頃のフランスの絵やその他沢山のものを見た。少し疲れたから外へ

出る。出たところに丁度腰かけの高さに石の段が建物についている。そこへ掛けて煙草を吸う。昨日煙草屋へ入つてほかの人が買つている水色の包みのを買つたら実にまづくて日本へ帰つたような気がした。オランダでもう少しいいのを吸つて来たせいでらう。しかしこの煙草もここで吸つていると中々いい。すぐ目の前に小凱旋門が見える。それを見てチュイルリー公園を歩く。幾何学的な均整の美を持つている庭園である。草花が模様になるように植えてある。少し遠くから見るとまるで白く見える草がある。近づいてみると薄い水色なのだが、葉が光をよく反射するためか非常に白い。何という草かしら。それが花模様の中で独侍の一役を持っている。花壇の処を通り過ぎ、木立の中の茶店で暫く休む。

そこを出るとコンコルド広場である。エジプト文字の書いてあるオベリスクを見る。ナポレオンがエジプトから持つて来たものだ。その向こうがシャンゼリゼーだ。写真で見ていた美しい街路樹の下を歩く。昨日エトワール・フランスのバスで素通りしたアヴェニュ・デ・シャンゼリゼーをエトワールの広場まで歩く。凱旋門を眺め、三十フラン出して上へ昇つてみる。階段がずいぶんあって途中で少々辟易する。五十フラン出してエレベーターへ乗ればよかつたが、歩いて昇るのもわるくない。上にちよつと広い部屋があつて写真や版画などでここ歴史を見せてる。そこを出ると見晴らしがいい。アヴェニュ・シャンゼリゼーを初めとして、ここから何本通りが出ているかと思つて数えてみたら大小合せて十二本あつた。西の方に木の茂つているのはブーローニュの森である。

階段の途中に薄暗い所があつて、下りるのは昇るのよりも面白くなつた。今度はシャンゼリゼーのさつきと反対側を歩き、グラン・パレーとブティ・パレーの間を通つてアレクサンドル三世橋へ出た。美しい橋である。袂の四隅に塔が立つていて其の上に金ピカの彫像がある。橋か横側も美しい装飾が施してある。

そこからセーヌ河の北岸を歩く。やがて古本屋がつづく。少し覗いてみたが、頭が少し疲れているから直きやめにした。サン・マルセル街でビールを一杯呑み、その隣りの雑貨店でスリッパを買って宿へ帰る。ビールは一杯三十五フラン、スリッパは三百五十フランくらいだつたと思ふ。昨日と今日の経験でパリの物価の見当が大体ついた。

宿へ帰つてお湯の栓を捻つたら温いのが出る。有難い。バスを使う。そう言へば今朝顔を剃るとき湯が出ていたような気がする。昨日はどうしたのだらう。一日おきかな。今日はゾーシュではなく温いお湯でいい気持だつた。それからこの宿は安いせいだらうが、便所へ新聞紙を切つたのが置いてある。うちにいるときと同じでいい。全くアト・

ホームという感じだ。

夕食は昨日のアラゴーへ行く。この宿ではフランス語しか通用しないし、外へ出てもおほむねそうちだから、少ししゃべる稽古をしようと思い、レストランで無駄口を叩いた。「僕はレストラン・アラゴーが大好きだ。アラゴーはフランスの偉い科学者で、僕は日本小さな学者なんだ」と言ったつもりだが、このウエートレスはアラゴーを知らないらしく、小さなレストランだとばかり、「ブティ」を繰返していた。パリはこういう打ち解けた気持ちしてくれた。

夕食後ショアジー街へ行つてみる。ゴブラン通りを行つてイタリア広場を過ぎ殆んど真直ぐ行けば直ぐだ。日本の知人の知人がそこに住んでいるというので手紙を持って来たからだ。訪ねる人はカンヌへ行つていて九月の何日とかでないと帰らないそうだ。手紙はコンシェルジュへ預けて帰る。

一九五〇

八月二十六日土曜

七時半にちよつと目がさめたが、まだ眠いので寝た。今度目をあけたら九時だった。昨日のレストランまで行つて三日目パンを食つ。今日は五つ持つて来たのをみんな食つてしまつた。あとで笑つたかも知れぬ。そこでゆつくりしていると十一時になつた。今日はセルジエスク教授を訪ねるつもりなのだ。

電話があるかどうか分らなかつたので、いきなり訪ねた。電話は持つていないうそだ。いろいろ話し学会の印刷物などを貰い、歴史学の国際会議のことを聞く。八月二十八日から九月三日までソルボンヌで開かれるのだ。この中に科学史の関係もある。これは日本を立つときは知らなかつたのだが、出てもいいそつだから出ることにする。夫人の本は日本語に訳されていることはペルセネール教授から聞いたが、その本を見せてもらつた。筆名をマリア・カステルスカといい、日本語に訳された本は「古代波蘭傳説」というのだ。その原題を手帳へ教授に書いてもらつ。原文フランス語だ。

十一時になつたから辞去する。一旦ホテルへ帰り、貰つた印刷物を部屋へ持つて行つてもうう。歩きながら本屋があり次第カステルスカ夫人の本をきいたが何処にもなかつた。そのうちにルクサンブル公園の前へ出た。写真で見覚えのある渾天儀を支えている噴水がある。もっとも水は出でていない。ここもまた美しい公園である。近代美術の展覧会は今はここではやつていなうそうだ。パレーの裏側に本屋があつたのでまた覗く。その近くの古い建物の正面に「LIBERTE EGALITE FRATERNITE」と書いてあるのを見た。「自由・平等・同胞愛！」しかし、その自由と平等は多くの血を流して得られたものであることを思う。この美しい町に嘗てどれだけの血が流れたか知れない。それは決して過去ばかりではない。町の所々に花が捧げてあるのに既に気がついたので、近づいてみると石のタブレットに、「ここは一九四四年某月某日一二等兵誰それが祖国の平和のために斃れた所だと刻んである。そのときノンコルドの広場にバリケードが築かれたのである。そして同胞愛は戦死者の墓へ毎日赤い花を捧げさせる。同胞愛は一層広くなつて友愛である。パリはこの友愛を以てすべての人間を抱擁してくれる。私をしてレストラン・アラゴーで無駄口を叩かせるのもパリのこのフランセ二テだ。

妄想をしながら街を歩いているとエッフェル塔がすぐそこへ見えたので、そつちへ行く。間もなく塔の前へ出た。三田フラン出して一番上まで登る。途中で一二三度乗りかえた。初めは登山電車のように斜めに登り、それから垂直に登る。着いたところがトロアジェーム・エタージュで、そこから四五メートル上が気象観測所になつてゐる。その側面にタブレットがあるから読んでみると、一八九八年十一月五日デュクルターによつて此のプラットフォームとパンテオンの間(距離四キロメートル)で最初の無線連絡が行われたことを記念すると書いてある。

111は高さ四〇〇メートルだから見晴しがいい。パリが一瞬のもとに見られる。すぐ目の下がシャン・ドゥ・マルスの広場、ここは嘗てシャルルの作った最初の水素気球をあげたところだ。その向こうが陸軍兵学校。もう少し先を見るとアンヴァリッドやパンテオンのドームが見える。ノートルダムの尖塔も見える。もつと向こうに東北に田立つてゐるのはサクレ・クールであらう。西側へ廻ればすぐ下にセーヌ河が流れて居り、向側がトロカデロである。そのさきにはブーローニュの森がひろがつてゐる。街なかも木が多い。シャンゼリゼーの並樹が美しくチュイルリー公園へ続いてゐる。

絵はがきを少し買って一三枚書く。シャンゼリゼーで一枚一十フランのがここでは一十五フランだ。富士山の上で草鞋が高いのと同じ理屈だらう。そのしるしにかエッフェル塔のついた切手みたいな記念スタンプが貼つてある。トイレットがあつたから入つておく。番人がいるからこれはただでは済まないことは直ぐ分つた。五フランでいいかなと思つたが十フランやつたら「メルシー・ムッシュ」。出口で何とかが三フラン、何とかが十フランと書いてあるのがちらと見えた。それがどうこう区別であるにしろ多い方を払つたのだから間違ひはない。僕のは三フランのに該当したのかも知れない。パリにはこういう商売もある。

飛行機に乗つていて下を見ても少しも危いといふ感じはしなかつたが、この塔の上から真下を見ると何だか少し田まいがしそうな気がするのはどうこうわけだらう。だいぶ高いから風がひやひやする。今朝から少し曇つていたが、そのうちに驟雨が来た。しかし、馬の背を分けるほどの部分的のもので、下りてしまつたら殆んど止んでいた。塔の脚の西北の隅にエッフェルの像がある。河岸へ出てトロカデロの方を眺める。

それから今日はセーヌ河の南岸をゆっくり歩く。途中にゴーティエ・ヴィラール書店があつたからショーウィンドーを見る。買ってもいい本がだいぶある。危険、危険。うつかり中へ入るとたいへんなことになる。見過してノートルダムを外から見る。或る橋のところで人相のよくない男が近づいて来て「ハウ・ドゥ・コウ・ドゥ」と英語で話し

かけて來た。何のことかと思つたらドルを持つてゐるか、四五〇で買うと言つてゐるらしい。さすがに種々の人間がいる。もう少し軟いのでは昨日凱旋門をぽかんとした顔をして見物していたら、妙な写真は要らないかと言つてゐた。「ノン、メルシー」と言つたら、あつはあつは笑つてゐた。この男の方が人相がよかつた。

サン・マルセル街の昨日スリッパを買つた雑貨店に石鹼があつたのを思ひ出し一つ買つ。六十五フラン。ゴブランの辻で「フランス・ソワール」を買って宿へ帰る。今日はお湯が出ない。どうも一日おきらしい。しかし一日おきに入浴すれば今どき非常に贊沢だ。うちではせいぜい一週二回ぐらいしか立てないのだから。セルジエスク教授から貰つて來た学倉の印刷物を読む。

八月二十七日 日曜

九時までねてしまつた。すつかりパリ式になつた。カーテンをあけてみるとよい天氣だ。日曜ではあるし、今日はフォンテンブローへ行つてみよう。うちでパリの下調べをして來たからフォンテンブローはリヨン駅から行けばよいことを知つてゐる。その駅もすぐ分る、駅へ着いたら十時半だつた。アムステダムではライデン行の切符を買うとき発音がわるいせいか分からぬで苦労したが、フォンテンブローの往復切符というのが一声で通じた。売店でフォンテンブローの地図を買つ。改札口を入つたところに何処行は何時何分で何番のホームと書いてあるらしいが、めんどうくさいから通りかかつた年とつた駅員にきいたら、時間とその表を見て七番ホームと教えてくれた。行つてみると外を暗緑色に塗つた列車がとまつていて、たいてい喫煙車と書いてありたまに禁煙車がある。喫煙車の方へ乗る。少し早いのか客はほんの少ししかいない。煙草に火をつけ地図を見る。客が段々ふえたが掛けるところがなくなるほどではない。これで赤字にならなければ日本の鉄道よりもマネージメントが余程うまいのだろう。三十分くらい待つたら発車した。パリのまちなかから煙をはいた汽車が出るのだから面白い。煤煙が入つて来る。日本の汽車を思い出してなつかしい氣がした。十分するとすつかり田舎である。牧場もあるが、アムステルダムの郊外のように牛が沢山はいりない。ほんのちらほらである。煙もあつて菜のようなのが作つてある。藁におに似たものがあるが、乾草だらう。乾草と思うと、マルケンの島へ行く途中でチーズを作る所を見物したとき、乾草うず高く積み上げた納屋の中を通り、乾草の匂がふんと来たのを思い出した。フランスの藁におは、大体日本のと同じ感じだが・もつと幾何学的である。上が円錐でその下は真直ぐな円柱である。幾何学の発達した國はちがつたものだ。

高圧線の所々に白と赤の玉がつけてあるのは注意のしるしだろうか。沿線にある家の屋根は褐色の瓦が普通である。壁は煉瓦もあるが、白茶のしつくいのが多い。だんだ

ん木が多く見えてくる。柳、シーダー、ポプラ、アカシアなどは分るが、あとは分らない。松の木もある。それはイタリアで見たのに似ていて日本の松とちょっと異つている。やがてボア・ル・ロアという駅があった。もうフォンテンブローの森である。次がフォンテンブロー・アヴォン。ここで下りる。下りる人が大勢ある。シャトーへ行く電車がある。小さなもので、日光や伊香保の電車と同じ程度である。シャトーまで三区で六十 Franc。途中に別荘風の家がある。別荘もあるだろうし、常住の家もあるのだろう。すぐに寛殿へ入らずに其の前を通り過ぎてオベリスクのあるところまで行き、そこから左へ曲って森を見る。美しい森だ。大きな木が茂って居り、深い山へ行つた感じがする。

少し歩いてから更に左へ曲つて庭園の中へ入る。これも写真で見覚えのあるところを通る。さつき見て通つた寛殿の正面へ行き石の階段を登る。この階段の形式は古風である。行列に加わつて暫く待ち十五フランの入場券を貰つて入る。三四十人たまるのを待つて入場させ、その一団に一人の案内人がつくるのである。説明は初めフランソワ・ブルミエとかナポレオン・ブルミエとかいうのばかりしか分らないよう気がしたが、よく聞いてみると少しは分るところもある。説明人は血色のよい若い男であつた。あのゴブランは誰とかの作でとかなんとか説明している手先をふと見ると左手の薬指が第二関節からなかつた。戦争でなくしたのではないかと思う。

この寛殿の正面がひどく古風だと思つたのも道理、説明を聞いてみるとこの寛殿の歴史は古いのだ。フランソワ一世のサロンだの、ナポレオンの部屋だの、マリー・アントワネットの部屋だの、豪奢なものがいくつもある。マントルピースなどもイタリアの大理石を持って来て作ったとか、様々のがある。それから次は「シャムブル・ア・クーシュ」へ参りましょうというのが何回かあって、しまいには見物人の額を解いた。アントワネットの寝室だのいろいろの寝室がある。

一周り説明が終ると案内人が「ボン・ソワール！」と言つて帽子をとつた。まだやつと三時位だが、こうこうものかしらと思つ。がまぐちに小銭 といつても形はなかなか大きい、十フランの二ヶケルは昔の五十銭銀貨くらい、一フランはアミニウムで軽いが形はそれに劣らず、二フラン、五フランのアルミニ貨は少しづつ大きくなる——をはたいてそつと掌の中へ入れてやつた。

そこを出てさつきの石の階段を下りるところに、滑るから注意しろと書いてある。それを見て一二歩踏み出したとき滑つたが、転ふぼどではなかつた。大理石質の石が毎日の見物人の靴で磨かれていてなるほどよく滑る。広い石だたみの前庭がある。ここをクール・デ・ザディユーといつ、ナポレオンが譲位のとき親衛隊に別れを告げた所の由。

宮殿の横の池の周りを歩いて花園の方へ出る。ジャルダン・ドゥ・ディアーヌという庭園を見る。フォンテン・ドゥ・ディアーヌという泉がある。少し雨が降つて来たのでアーケードを見つけて待つ。すぐにやんだ。

宮殿の裏手の方に浅草のような盛り場があつてメリーゴーランドや何かがはやしててているのは思いがけなかつた。その横に長いキャナルがある。電車の停留場へ出て暫く休む。電車で駅まで戻り、上りの時間を見ると一小時間あるので駅前のレストランで休む。往きにはリヨン駅からフォンテンブロー・アヴォンまでの間で三つ四つの駅しか止まらず、時間は一時間くらいだつたが、帰りの汽車は小さいのもみんな止まつた。何でも一二三の駅があつたと思う。汽車へ乗つてからまた驟雨があつた。右手に美しい虹が見えた。虹を「空の円弧」というフランス語はやはり幾何学的だと思う。

リヨン駅へ着いたら雨は降つていなかつた。六時半頃宿へ帰る。暫く休んでアラゴーへ夕飯に行く。晩はアラゴーと決めた。今夜ゴブラン通りとサン・マルセル通りの辺に近いカフェーの前でダンスをしているのを見た。みんなきれいに踊つてゐる。それを見物している人も大勢いた。今夜は月が殆ど丸だ。雲が少し動いてゐる。

八月二十八日 月曜

昨夜もなかなか寝つかれなかつた。このあたりは割合静かとはいゝ、自動車は夜おそらくまで通つてゐる。眠ろうと思つてもパリの町はまだ宵の口だという感じである。日記に書き落したことなどが次から次へと思い出されて、起き出して書こうかと思つたが、明日は学会があるからそんなことはやめようと思つ。しかし折角流れ出したのを忘れてしまつても困るので、忘れないように頭の中で作文をする。そんなことで中々眠れなかつた。今朝一度目が開いて時計を見たら七時半だから、まだ少しいいだらうと思つてまた眠つた。次に時計を見たら九時だったので飛び起きる。もつとも会は十時からソルボンヌだから十分間に合つのだ。

「JのJ」のはゴブラン通りのオウ・ロワ・デュ・カフュといつひで朝食をとることにしている。それからソルボンヌへ行く。コングレスの受付へ行き、私は会員ではないのですが、教授からこのコングレスのことを聞いてきました、傍聴させて貰えますかと聞き、こういふもので、払います、いくらですかと聞く。一千フランだという。払つた。すぐに会員券に名前と番号を書き入れてくれた。講和条約がどうのこうのそんな事は一言もなかつた。それからプログラムや何かをくれ、午後印刷物を取りに来てくれとのことであつた。受付にいるお嬢さんがもう開会式が始まつてゐますと案内してくれ

る。

そこで大講堂へ入った。このコングレスは大きな会でソルボンヌのグラン・アンフィシアトルがいっぱいであった。ドクトル何とかの開会の辞は残念ながらよく分らなかつた。クルチュールという言葉が何回も出て來たので、香り高いフランスの文化の匂をいくらか嗅いだような気がした。大講堂の天井には美しい絵が描いてあつた。

終つて講堂の外へ出ると広い廊下の向側に腰のかけられる段がついている。そこへゆっくり腰をかけてプログラムを読む。しばしソルボンヌの学生になつたような気がして楽しかつた。この国では至極簡単にこの国際会議のメンバーにしてくれた。実は傍聴だけさせて貰えればよいと思つたのだが、会員券を貰れて、あなたはもう会員ですといつ。そうしてどの部会へ出てもよいのだといつ。すばらしい自由と平等と友愛ではなからうか。聞きたいと思う講演は非常に沢山ある。ゆっくりプランを立てることにしよう。

ソルボンヌの本屋で少し買物をして一回宿へかえる。11時から十五分くらいである。午後は一時からである。十二時から一時までは役所でも何でもみな閉めてしまう。博物館でもそうである。ルーブルは表は閉じないが、部分的にしめる。銀行は一時半から開くところもある。商店もたいてい閉める。カフェーやレストランはむろん別である。

宿の近くの銀行で旅行手形をフランに換えて貰いソルボンヌへ行く。厚い印刷物を貰う。

帰りはサン・ミシェル通りへ出るルクサンブル公園の脇を通り。ゆっくり歩いて例の噴水の横まで來るとうしろから來た僧服の青年がメトロは何處かときいた。あそこからだろうと指さしながら答える。ポール・ロワイヤール街へ出る角あたりにあつたと思つたからである。勉強に來ているのかと聞くから、コンフェレンスに來たのだと答える。歴史学の会か、僕もそうだ、カトリックの会だと言つていた。アメリカから來た由。僕を留学生かときいた。そんなに若く見えたのかと思つ。もつともこの年で留学生でもないなどと思うわけでは更々ないが、一瞬そういう感じが雲のように通り過ぎたのである。パリが、そうしてソルボンヌが僕を若々しくしてくれたのかも知れぬ。現に今朝ソルボンヌ大学の廊下で留学生になつたような悦びをさえ感じたのであつた。

その青年とメトロの入口のところで別れ、ポール・ロワイヤール街を歩いて帰る。パスカルがいたポール・ロワイヤールの僧院はこのあたりにあつたのだらうか。キュリー夫人がワルシャワから出て来て初めて下宿したのはポール・ロワイヤール街からベルテ

ロ一街へ曲る角の小さい裏通りのフラテル街であった。島崎藤村が下宿していたのもこの辺だ。

今日はアラゴーがしまつてゐる。定休日だろうか。サン・マルセル街のもう少しレストランらしいのへ入る。ここはちゃんとギャルソンがいて、テーブル・クロスも少々きれいだ。アラゴーなどはテーブル掛けの上へ紙を書いて、それを取りかえる式だ。等級をつけたらきっとD級くらいだらう。今夜行つたのはC級くらいか。B級の「下ぐらいか」も知れぬ。メニューではアラゴーと同じようなものを食つたが二倍くらい取られた。アラゴーだけがパリのレストランだと思わないためにこれもいくらか参考になるだらう。

今日はまた湯が出ない。一口おきのことが確かになつた。今朝は湯が出たが、朝は沸かすとみえる。コングレスのレポートにアメリカのゲルラックという人が科学史について大いに述べている、この会議は非常に用意がよくて、大きい報告は印刷ができているのだ。これはとても便利だ。それからさつき買った本を少し見る。

一九五〇

八月二十九日 火曜

予定れてゐなかつた會議があつたり、また東京へうまく接續する飛行機の便は一週一回しかないさうだから、パリ滞在の延期をして貰はなければならなくなつた。エール・フランスで呉れた地図の裏に滞在の延期をしたいときはソーセー街十一番地のミニーステル・ドゥ・ランテリュールへ行けと書いてある。アムステルダムで査證を貰ふとき、あの親切な婦人館員の好意に甘んじて、実は申請書へ書いたのよりもう少し長くして載きたいのですがといふと、それは此処ではできないからパリの外務省へ行つて説明しないと言つたやうに聞いたのだが、この案内書には内務省と書いてある。とにかく其処を訪ねて行つてみると、メトロでオペラまで行き、地図を見ながら行くと直ぐ分つた。黙つて入つて咎められでもすると詰らないから、守衛に滞在の延期をしたいのですが何処へ行くのですかと訊ねた。そのたどたどしい會話をしてゐるのを中から出て来た赤い上衣を着たお嬢さんが聞きつけて、それはミニーステル・ドゥ・ランテリュールだけれども、ここではなくてフリードランド街だといふ。持つてゐた地図を差し出してよく教はらうとしたら、いきなり僕の胸から萬年筆を抜きとり、キヤップを外してこれを持つてゐるところに僕の方へ突き出すから、恭しく受け取つて持つてみると地図の余白へ「二八、アヴェニュ・フリードランド」と書き、更に「一二一、スタシオン・バルザック」と書いて「一二一」というバスに乗り、バルザックといふ停留場で下りるのだと教へてくれた。そのときはもう十二時に近かつたのだが、今行つても駄目だから二時過ぎにいらつやいと附け加へ、それから分つたかと念を押す。これもまた何といふ行き届いた親切であらう。

今日の晝休時間はブティ・パレーの展覽會を見ようと思つて、ガブリエル街まで来るとその横丁のリュー・ドゥ・レリゼーのメーヴン・ドゥ・ラ・パンセー・フランセーズというところにマチスの個人展覽會があるといふので入つてみると、古いのもあるが今年のもあつた。数は少い。目録を買はうかと思つて立つて見てみると、賣場の中々品のあるお婆さんが「ス・ソン・デコレー・パール・アンリ・マチス」と一語一語区切つて説明してゐた。それは自分へではなく賣場のすぐ前に立つてゐた一二人連れの婦人客を異邦人と見て、さう説明したのである。それから気がついたやうに「あなたはフランス語をお話になりますか。」ときいて、あとは普通の調子で何やらしゃべつてゐた。そのおかげで目録の表紙がマチス自身の装模であることが知れた。二百五十フランだつ

たかで余り安くない。入場料も百フランだつた。

それからブティイ・パレーへ入る。これは市立で百フランとる。ルーヴルは國立で三百フランだ。ここにはフランスの古い繪が多いが、近代のもかなりある。カンタン・ドウ・ラ・トゥールのダランベールの肖像があつた。本に出てゐる顔だ。繪はがきがあつたら欲しいと思つたが、かういふのは出来てゐない。「ラ・ヴィエルジュ・ダン・ラール・フランセー」という本になつてゐるのを買つたが、もちろんそれにも載つてゐない。それはフランスの極く古い繪画や彫刻の図録である。この中に十三世紀ごろの繪画や彫刻がだいぶ出てゐるが、このやうに一箇所へ集めてみると人物の顔に或るタイプが感じられるやうである。おそらくフランスの顔なのであらう。

午後フリードランド街二八番地へ行く。やはリミーステル・ドウ・ランテリュールで、なるほどこちらが旅券係である。エール・フランスの案内は間違つてゐる。受付へ滞在延長のことをいふと向つて暫く待てといひ、だいぶ待たされた。やがて呼び出されて案内された室へ入ると、ここは男の役人だ。この人は少々こはい感じがした。

「汝は何を欲するのか」という風に聞えた。滞在を十日ばかり延長して欲しいといつた。それはプレフェクチュール・ドウ・ポリスへ行けといふ。何處かときいたらシテだといふ。そのサンキエーム・ピビューローと紙片へ書いてくれた。恐い感じがしたのは縁の太い眼鏡をかけてゐたことや、男性的な言ひ方のほかに、こつちが言葉が下手でびくびくしてゐたからのことであらう。行くべき役所の中の課まで書いてくれたのだから親切なわけだ。この案内書きによつて来たのだが、これが間違つてゐるのでせうかと言つたら、それには答へず短い延長はプレフェクチュールでやるのだと言つたらしかつた。

そこはエトアールから出る放射状街路の一つで凱旋門から遠くない。シャンゼリゼへ出る。もう街路樹の紅葉しかけてゐるのがある。パラパラと散つてゐる木の葉もある。パリはもうすっかり秋だ。今朝はだいぶ涼しかつた。明日はシテのプレフェクチュール・ドウ・ポリスへ行かなければならない。

宿のマダムが「どうだ満足か」ときくから「ウイ、ト、コンタン」と答へてやつた。「トレ・ビヤン」と言つてここにこしてゐた。ほんとに自分に恰好のホテルだ。お釣にあちこちで貰ふアルミ貨は始末がわるい。それをぶちまけて、僕はこれは嫌いだから好かつたら使つてくれと言つたら、一寸待てと言つて二十フラン札を持つて来て換へて呉れるといふ。自分の出したのを念のため数へてみたら十九フランで一フラン足りなかつた。しかし折角換へてくれるといふのだから「メルシー」と言つて札を貰

つた。「コンタン」はそれに続いての話だつた。これはもう黙つてもアラゴーで注いでくれる一杯の葡萄酒の軽い酔ひがまだいくらか残つてゐた仕業である。といふよりもパリが私の心に自由を許すのだ。

八月三十日 水曜

シテのブレフェクチュール・ドゥ・ポリスへ行く。警視廳みたいな役所なんだらう。昨日教はつた第五課といふのをきいたら「の階段を上れといふ。上つて行くと、何番とかの室へ行けといふ。行つてみると、『延長係』という室だ。なるほど！　だいぶ大勢人が待つてゐる。男と女の係員がゐる。暫く待つて自分の番が来たらしいので婦人係員の方へ行つて話した。待つてゐるうちに見るともなく見るので、みんなが旅券のほかに何か紙きれを持つてゐる。これは何か要るのだなと思ふ。果して居住證明が要るのだといふ。自分のは延長の方は訳を話したら直ぐ承知してくれた。その證明はホテルで書いて貰つてその地区的警察のスタンプを貰つてくるのだと教へてくれた。昨日の役所ではそこまでは教へてくれなかつた。さうして午後二時過ぎかまた都合で明日いらっしゃいといふ。

宿へ帰つて話すと、ぢやマダムに書いて貰つてあげるといふ。何だ、今までマダムと思ひマダム、マダムと呼びかけてゐたその人はマダムではなかつたのか。飛んだ失礼をしたと思ふ。出て来たマダムはずゐぶんお姿さんだつた。今までマダムと思つてゐた人はどうも使用者のやうには見えない。おそらく娘だらう。顔が似てゐるかどうかはそこまで判断ができない。時々鍵を出してくれるお爺さんはこの娘のお父さんで、こここの御亭主ではないか知ら。どうもうちのものとほんの一人一人の使用者だけでやつてゐるらしい感じなのである。

そのマダムが證明書はすぐ書いてくれた。この異邦人の変な綴りを書き悩んでゐる様子なので、傍からそれはイ・グレックとか何とか言つてやつた。コンミサリアは何處かときいたらヴォークランの一番地だといふ。地図を出して指して貰うと直ぐそこだ。さうして、すぐやつてくれますよ「トゥー・ドゥ・スイット」といふ。行つてみるとすぐ判を押してくれた。

午後ブレフェクチュールへ行つて丁度二時に入つて行くと、さつきの人が席についたところでまだ誰も來てゐなかつた。證明書を出すと「それよ」とばかり「セツサ！」と言つた。何日位延長したいかといふから十日ほどといふと「ぢや十五日にしておきませう」といふ。有難うございましたと言つて立つと、につこりとして會釋した。ちょうどアムステルダムのフランス領事館ひ婦人館員と同じ様子であつた。何だか顔つきまで似

てゐるやうな気がした。二人とも實に懇切な人たちである。

だいぶ駆け廻つて疲れたが、これで大事なことが一つすんだ。二度目にプレフェクチユールへ行く前に時間があつたのでルーヴルへ行つた。今日は中へは入らず繪はがきと印刷物を少し買った。これから少し散歩をしよう。ポン・ヌフからリヴォリ街へ出る。サン・ジャックの塔の傍を通り、オテル・ドゥ・ヴィルの脇を通る。その道はやがてサン・タントワーヌ通りとなり、バスチーユの塔が向うに見える。途中に本屋があつたので覗くと、昨日ソルボンヌで気がついたフランクの「アインシュタイン」その生活と「彼の時代」のフランス訳があつた。これは現在の人のことを書くには少し妙な題だが、フランクのだから買つておくことにした。もう一軒の小さい本屋にはたいしたものはなかつたので繪はがきを四五枚買ふ。

バスチーユの廣場で「七月の塔」を見ながら休む。さつき買った繪はがきの中へバスチーユの廣場を入れたつもりで、出してみたらヴァンドームの廣場のだつた。スパイラルに浮彫のある塔のあるところだ。アムステルダムのフランス領事館に航空會社のポスターがあつて大きな写真が出てゐたのがこれだつた。ヴァンドームの廣場へはあらためて行つてみなければならぬ。

廣場のカフェーで繪はがきに書きながら休んでゐると浮浪人が足もとまで吸殻を拾ひに來た。煙草を二三本出してやり、自分のへつけるついでに火もつけてやると、しきりに何か言つてゐるがよく分らない。何處の國の人かときいたらしかつた。かういふ人と話などしてカフェーで嫌がるとわるいと思ひ、黙つてゐたら向うへ立ち去つた。吸殻を拾つてゐる人はパリでかなり見た。今のは本職の浮浪人のやうだつたが、もつと普通の様子の人が拾つてゐる。着いた日の晩にサン・マルセル街すでにそれを見た。

カフェーのすぐ前にメトロの入口がある。そこを入ると地下道にギターか何か弾いてゐる盲の女があつたので二十フランの札をそつと箱に入れてやつた。煙草もこれも滞在延期がうまく運んで心が弾んでゐたためであらう。

メトロでプラス・ドゥ・ラ・ナシオンへ出る。廣場の東に女神の像が二つ立つてゐる。そのあたりを暫く歩いてから、メトロでプラス・ドゥ・ラ・レビュブリックへ行く。今日はプラス廻りになつた。ここには右手に月桂樹か何か持つた女神の像がある。台石には例の「自由・平等・同胞愛」が彫つてある。その小公園のベンチで休む。暫くすると向うの方で人相のよくない婆さんが何か押賣りしてゐるのかと思つた。やがて僕のところへも来て、小さな切符のやうなものを突き出し「ラ・ショーズ」という。それでベン

チの使用料を寄越せといつんだと分つた。切符には6と書いてあつた。十フラン出したらお釣をさがすやうな様子だからいいと言つた。

今日は日中はいくらか暑いくらゐだつた。しかし朝晩はかなり涼しい。アラゴー通りの並木はだいぶ紅葉してゐる。だんだんコトリロの色調になつて来る。昨夜湯が出たから今日は休みかと思つたら、湯が出るのでバスを使う。もつ水浴はとてもできない。

八月三十一日 木曜

ゴブランからジヨルジュ五世までメトロに乗り、シャンゼリゼーの航空會社へ行く。水曜日にローマ発マニラ行が出るといふ。すぐ電話をかけて十三日の水曜のは席があるといふ。ローマで一日泊るかといふから、ヴィザが面倒ぢやないかと言つたら、席の豫約をした切符を見せねばわけないといふ。それで十一日にパリを立つことにした。ローマで一日半あるといつて時間を書いてくれた。しかしパリ・ローマの席は明日の午後五時にならないと分らないからそのとき来てくれとのことである。切符を預けて其処を出る。

小雨が降り出したのでロンボアン・デ・シャンゼリゼーの木の下で暫く休む。雨宿りしてゐる人が他にもゐる。少しくらゐの雨は平氣で歩いてゐる人が多い。止みさうもないし、たいした雨でもないから出かける。フランクリン・ロ・ルーズヴェルト街のグラン・パレーへ入つてパレー・ドゥ・ラ・デクーヴェルトといつ科学博物館を見ようと思ふ。ところがまだ昼休時間である。そこでチュイルリー公園の方へ歩いて行き、ヴァン・ドームの廣場の塔を見ようと思つた。その途中で古版本を賣つてゐる店を見つけた。ショーウィンドウを見るとモンゴルフィエの風船の報告書がある。千七百何年かのだ。「トレ・ラール」と書いてあるから相当高價なのであらう。この店も昼休みで閉つてゐるのが幸ひだ。かういふものは外から見るだけに限る。こんなのが五十フランくらゐでセーヌ河畔の古本屋にないものかなあと思ふ。

そこから少し行くとヴァンドームの廣場である。螺旋状に戦争の物語が彫りつけてある。つまり繪巻物を柱に巻きつけたやうなもので、ローマのトラヤヌスの柱の真似であらう。台石に一八〇五年と彫つてある。さつきの本屋をもう一度覗いてチュイルリー公園へ入る。雨がだいぶ降つて來たので木の下で雨宿りをする。少しばかり水溜りができる、雀が水を浴びてゐる。若い男女が向うの木の下で戯れてゐる。木の葉を集める車を引いてゐる公園の人たちも雨宿りをしてゐる。中々やみさうもないからメトロで宿へ帰らうと思ひ、雨の中をコンコードの停留所まで歩く。そこの石の壁に五六枚並べて兵士の墓標があり、赤い花が供へてある。

1の電車へ乗つたのだから、パレー・ロワイヤールで乗り換へればゴブランへ出られるのだが、気まぐれにそのまま乗つてポルト・ドゥ・ヴァンセンヌまで行く。ヴァンセンヌの森もプログラムの中へ入つてゐたからだ。外へ出てみるといい塩梅に雨はやんでゐる。しかしヴァンセンヌの公園はまだこの近くではないらしい。このあたりはだいぶ場末の感じだ。少し歩き廻つてプラス・ドゥ・ラ・ナシオンまで戻る。例の女神が二人道の両側に立つてゐるところだ。この廣場は割に静かなところだ。メトロへ入るとエトワール行という電車がとまつてゐる。ここが始発である。それに乘る。ルーヴルの方を通るのかと思つたら、南の方をつまりプラス・ディタリーの方をぐるつと廻るやつだ。この線は時々地上へ出る。たゞどうトロカデロまで乗り、そこで下りた。この間はずぶんある。さつきは雨がやんでもたが、トロカデロで外へ出たらまた降つてゐる。博物館のポーチで雨を除けながらあたりを見廻し、向側のカフェーへ入り茶を呑む。今日はもう博物館を見るのはやめにしてゆつくり休む。うしろにゐた若い男女はドイツ語を話している。ここにギャルソンはドイツ語を知つてゐた。その連中が立つとき「ダンク・ショーン」と言つてゐた。それから間もなく僕も立つたが、さつきの惰性で僕にもさう言つた。

さつき覚えたメトロでプラス・ディタリーへ帰る。ここで乗り換へると次がゴブランでたつた一丁場だから下りてゴブラン通りを歩く。途中にゴブラン織の工場がある。木曜の午後二時から四時まで無料で見せると書いてある。ちょうど今日だ。しかし通りに面した大きな窓が開いてゐて中がだいぶ見える。それで織る機巧の極く大体は分る。

ヨーロッパの雨はどしゃ降りはないものかと思つてゐたら夕方六時過ぎからかなり強く降り出した。アムステルダムに十日ゐる間に雨は何日か降つたが、たいてい小降りであつたレーンコートだけで傘なしで済ませて來た。今日は傘なしでは歩けない。エッフェルへ行つた日に空模様がわるいので買つた傘をさして夕飯を食ひにアラゴーへ行く。「ソワール」を見てゐるとトランス・ワールド・エアラインの飛行機が昨夜カイロの近くで遭難して生存者なしださうだ。

一九五〇

九月一日 金曜

日本の震災の日。少し雲があるが雨は降つてゐない。ゴブランの辻のオー・ロア・デュ・カフェーで朝食をとる。朝はここに定めてしまつた。初めカフェーはグラントかといふからウイと答へ、オー・レーかといふからさうだと言つたら、もう黙つて掛けてもグラント・カフェー・オー・レーを持つて来る。つまり牛乳入りコーヒーの大きいコップだ。これを呑みながら三田円パンを食ふのは中々うまい。あのパンはバタが沢山入つてゐると見えてふかふかで、何もつけないでコーヒーを呑みながら食ふやうにできてゐる。朝はたいていこれだけらしい。もつとも朝でも葡萄酒を呑む人はゐるやうだ。あれは我々のお茶と同じだらうから。晝や夜のパンは例の棒のパンを切つたのである。これは単純なパンで外側は少し固いが、それをポリポリ食ふのが中々うまい。アラゴーではそれを十二、三センチの長さに切り、中程に庖丁を入れたのを出すが、四五センチの厚さに切つたのを四つか五つガラス鉢に入れて持つて来るうちもある。太さは日本の切らない麩くらゐである。まる」との長さは五六センチのから一メートルに近いかと思はれるものもある。これをよく人がむき出しのまま脇にかかへたり、買物袋へ突込んだりして歩いてゐる。レストランで使つるのはたいてい一メートルもある長いので、それを細長い柳の籠に入れて運んでゐる。

朝食ふので例のクロアッサンとこふ三田円パンでなく「パン」とこふのもある。それはちよつとカステラ式のパン菓子やうのものだ。婦人客などがよく食つてゐるのを見た。一度試みたことがあるが、朝はクロアッサンの方が僕は好きだ。これは朝に限つたわけではなく、おやつにも食つてゐるやうだつた。葡萄酒を呑みながらこれを食ふのがおやつに適してゐる。そのときはヴァン・ルージュつまり赤葡萄酒の方が似合ふやうな感じがする。

何かの話のつづきからセルジエスク教授が日本でもパンを食ふかといふので、大いに食ふ、さうしてフランス語と同じく「パン」と呼んでゐると答へたら「ホー」と言って嬉しそうな顔をした。そのあとでラテン語では「パニス」ですと教へられた。そこまでは知らなかつた。

このじろはづつと朝の三田円パンは三つにきめた。初めは朝が遅いのと、わざわざ町へ出かけて行くせゐか、腹がへつて四つか五つ食つた。日本では朝食も比較的多くとる

癖がついてゐるためもあり。しかしクロアッサンを五つも食ふフランス人はゐないらしい。あまりがわるこばかりでなく、段々慣れて来たら三つ食つてちょうどよくなつた。

「一ヒーの大の方は普通の「一ヒー茶碗の三杯分くらゐはある。肉の厚い重い茶碗である。三口月パンは二十フランであることがそのうちに分つた。」一ヒーは僕の行く家では二十五フランであつた。ゆつくり朝食をとつてソルボンヌへ行く。歴史学の国際合議のプログラムにメリディアンといふ本屋で歴史書の展覧即賣会をやるといふ廣告が入つてゐたので行つてみる。目録ができるといふから見せてもらふ。科学史の本もだいぶありさうだ。目録に出でてゐて品物のないものもあつたが、一つ一つ小さこものを買ふ。サン・ジェルマン通りから河岸へ出る。今日はアヴニユ・ドウ・ニコ・ヨークの近代美術館を見ようと恩ふ。バレー・ドウ・トーキョーと言ひ、割に新しい建物だ。以前ルクサンブルーにあつたのが近頃はここにあるさうだ。先づその近くのレストランへ入る。まだ余り腹もへつてゐないが、一時の開場に少し間があるから「一ヒーでも呑まうと思ったのであるが、「めしか」ときくから「ウイ」と答へる。そしたらコップを持って来たから「ヴァン・ブラン」といふことになるのである。ビフテキかなにか食つた食つてみれば別に多すぎるといふことはない。」一ヒーにしておかうと思つたのは主として経済的見地からである。腹の虫も満足したにちがひない。

アラゴーだと葡萄酒はコップに一杯だけ注いでくれるのだが、今日はドウミカといつから「ウイ」と答へた。ドウミ・ブーテイコはコップに一杯ある。ひるは殆ど呑んだことはないから少し酔つた。ちょうど時間になつたので美術館に入る。河岸に面したのがアヴニユ・ドウ・ニコ・ニーカー、裏がアヴニユ・ウイルソンで、バレー・ドウ・トーキョーはその間に挟まれてゐる。展覧会はベルマナンが三十フランでエクスピジション・タンボレールが五十フランと書いてある。八十フラン出して両方と言つたら、エクスピジションを買へばベルマナンは当然見られるのだと黙つて三十フラン返してくれた。臨時展の方は何とかいふ人の個人展で余り面白くなつた。常時展の方はすばらしいものが沢山ある。マチスの室、ドンゲンの室、グラマンクの室、といふ風になつてゐる。彫刻の室もある。

四時少し過ぎそこを出る。今日は五時に航空会社へ行く約束なのだが、まだ少し早い。アヴニユ・モンテニュを歩いてロンボアン・デ・シャンゼリゼへ出てベンチで暫く休む。自動車がひつきりなしに通る。どういふ用事の人が自動車を走らせてゐるのかと思ふ。ヨーロッパではもう見物客がだいぶ歩いてゐるから、さういふ人たちもかなり含まれてゐるだらう。合社の仕事で飛び廻つてゐる人もあるだらう。くだらない想像をしてゐるうちに時間になつたのでフィリッピン・エア・ラインへ行き切符を受取る。十一日パリからローマまでの席を予約する。八時十五分までにアンヴァリッドのエア・ステーションへ来てくれとのことだ。こいつは少々早いが、その代りローマ着は早い。

飛行機は十時に出るさうだ。イタリア領事館をきく。エール・フランスで貰つた案内に書いてあるのと少し異つてゐる。それにはリュー・ヴァレン五〇番地とあるが、リュー・ドゥ・ヴィラールの一だといふ。それからフイリッピンの査證はアメリカ大使館でやるさうだ。メトロでゴブランへ歸る。

今夜は九時から歴史学會議の會員券でルーグルを見せるさうだ。もつともこれはこの會員に特別に見せるのではなくて、金曜の夜は一般に開くのだ。ともかく行つてみる。イルミネーションでもするのかと思つた。案内書をよく見たらギャラリーをイルミネートするといふので、外をイルミネートするのではなかつた。これは書間暇のない人が見るものだ。特に夜見るべきものではない。夜見た方がよいといふ繪は余りあるまい。彫刻などは人工照明で見るのもちよつと面白いかも知れぬ。しかし入口がひどくこつた返してゐるから引返した。宿でバスでも使つた方がよっぽどよい。

ホテルへ十二日に立つ豫定だといふ。着いたとき一週間か十日だが都合で延びると言つてある。だいぶ延びるせいか一例のママダムがマドマゼルぢやなささうだ、亭主の顔は見かけないが、パリはどうかときいた。パリは好きだ、さうしてホテル・スニイも好きだと言つてやつた。その拍子に宿質を払ふのを忘れてしまつた。もう催促などはしない。豫定がついたから明日かためてみんな払はう。

九月一日 土曜

今日は少し雲がある。ゴブラン通りのいつものカフェーで朝飯を食つてゐたら目の前でぱつと火を吹いた。何事かと思つたらオートバイと自動車と衝突したのだ。自動車が方向交換をするため斜めに横断しようとしたのである。オートバイの男は倒れたままちつとしてゐる。すぐ人が向側の街路樹の根元へ連れて行つた。お巡りさんがかけて來た。五分くらゐすると擔架と看護婦が來た。日本では何分くらゐかかるだらう。看護婦がなにやら手当をしている様子である。通りの人が寄つてたかつて見てゐる。膝を怪我したと話してゐるらしい。やがて擔架でその男を運んで行つた。お巡りさんが大勢來て現場をしらべてゐる。自動車の男は怪我も何もせず、巡査に調べられてゐる。交通が激しいからかうじふことも時々あるのだらう。コーヒーを呑み終るころは人も散じてゐた。

アンヴァリッドの前のリュー・ドゥ・ヴィラールへ行つたら旅券の査護はリュー・ヴァレンの大使館へ移つたと書いてある。エール・フランスの案内の方が正しかつたのだ。PALのお嬢さん古いのを教へてくれたな。僕がリュー・ヴァレンぢやないかときいたり、いやリュー・ドゥ・ヴィラールの一だといつて紙に書いてくれたのだ。ヴァレンはさき近くである。そこへいく途中でロダン美術館を見つけた。これは何れ改めて来るこ

とにしよう。

イタリア大使館はすぐ分つた。四五人待つて査證を貰ふ。ヴィザの料金一八一六フランと窓口にあるから、それだけ用意して待つてゐたら一三一六フランだといふ。五〇〇フラン高いのはどういふ訛だらう。来るときローマで払つた三千リラより割高である。あれは数時間ローマにとまつただけだが、今度は一泊するからかな。別にわけはきいてみなかつた。

それから急いでガブリエル通りのアメリカ大使館へ行く。門がしまつてゐるので横の方からでも入るのかと思つて見過したら、向うの玄関に立つてゐる守衛が、閉めたといふ手真似をしたから、こつちでもさうかといふ合図をして時計を見たらもう十二時十分前だつた。今日は土曜日だから月曜に来ることにしよう。

チュイルリー公園へ入る。イタリア大使館へ行く頃小雨が降つて來たが、そのうちにやんだ。初めてルーヴルへ來た日に茶を呑んだ公園の店で休む。今日はこれからモンソーといふ公園を見よう。ここから歩いてもたいしたことはない。マドレーヌ寺院の美しいコロネードを見てブルヴァル・マルシェルブを行くとやがてサン・トウギュスタン廣場へ出る。そこにサン・トウギュスタン教会が立つてゐる。なほ真直ぐ行つて左へ曲つたところがモンソー公園である。落ち着いた静かな感じの公園である。入つてみるとあちこちのベンチに本を讀んだり、ちつと目を瞑つたりしてゐる人がある。案内記の写真で見覚えのあるローマの廃墟でも思はせるやうな石柱が立つてゐる。池はすつかり干あがつてゐた。木かげのベンチに腰をかけて休み煙草を吸ふ。

パリへ着いて間もなく煙草屋へ入り、ほかの人が買つてゐる水色の包みのを買つたら実にまづかつた。あとで包を見たら「ゴーロアズといふので、サブタイトルにコポラル・オルディネールと書いてある。なるほど安煙草と断つてある。二十本入り六十五フランだつた。これを吸つてゐる人が多いやうだ。その後もう少しいのはないかと思つて見廻してゐたら、バルトーといふのを出してくれた。これは百二十フランでちよつとよかつた。セニヨリータといふ巻煙草くらゐの小さい葉巻は十本入りでやはり百二十フランだ。上等煙草と看板を出してゐる店も所々にあるが、それでも品数も量も少い。フランスはマッチが前から高いのださうだが、日本の廣告マッチの大きさのが五フランだ。

この公園に里芋の葉そつくりの植物が芝生の真中に一株あつた。あれは里芋だらうと思ふ。その近くにモーパッサンの石膏像がある。暫く休んでからフランクリン・D・ルーズベルト街へ行き、パレー・ドゥ・ラ・デクーヴェルトへ入る。パレーといふのはグ

ラン・パレーの一部にあるからだらつ。發見の博物館といふほどの名であるが科学博物館である。物理の部にはアムペールの実験装置などがある。かういふ歴史的なものもあるけれども、陳列は飽くまで科学博物館の方式であり、特に歴史に重きを置いてゐるといふのではない。この点ライデンの科学史博物館やハーレムのテーラー博物館とは別である。ここでは例えば物理の中を力学、光学、電磁気学などと細かく分け、この中の主なる項目について解説がしてある。さうしてそれぞの主題についてこの国の学者が重要な貢献をしてゐる場合は肖像を掲げ歴史的な解説がしてあるといふ具合である。さうしてスワイッチを入れると動くやうになつてゐるものもある。光の屈折などでも水槽へ光束を送つてその曲るのを見られるやうになつてゐる。

数学の部も専門別にした上で、その應用まで示してある。種々の曲面の模型や、結晶学への数学の應用とかいふものが示してある。天文の部は写真や覗きめがねが多いのは当然のことであらう。丸天井に恒星を配して望遠鏡で覗かせるなどもあつた。そのほか化学や生物学関係もみんなある。フランスぐらゐ立派な学者が大勢出てゐれば、各分野において自國の学者の業績を並べるのも張合ひがあり、且つ見榮えがする。

賣店があつて本や印刷物を賣つてゐるから行つてみる。まへに日佛會館でフランス書の展覽會で見たダルソンヴァールの伝記がある。ブランリーのことを書いたのがある。ブランリーは無線の研究者だ。「わが父ブランリー」といふ題だから息子が書いたものだらう。セルジエスク教授が此處で講演したパンフレットもある。ここに賣場の婆さんは本を手にとつて見るとこつちの手許をちらと見るので嫌な婆さんだなと思つていたら、たうたう自分の前へやつて来て、此處は讀書室ではありませんと言つた。左様！ 知つてゐる。こちらには懐都合といふこともあり、どれとどれを賣はうか考えてゐるのだ。本をよく見ずにうかうか買へるものか。この婆さん無学だなと思ふ。尤もフランスの本は中が見られないやうになつてゐるから、雑誌や何かで紹介を讀んで判断し、買ふときは誰の何といつてあつさり買ふのが定石なんだらう。即座にダルソンヴァールを示して、これは見本だと思ふがきれいなのを出してくれと言つた。だいぶ汚れてゐるのだ。そしたらこれしかないと言ふ。次にセルジエスク教授のパンフレットはピンでぶつぶつとめた跡があるので、これはあるだらうと言つたら出してくれた。ブランリーは町の本屋にあるだらう。つらあてに沢山買ふ必要もないから一つだけ買つておつさと出る。婆さんメルシーとも何とも言はなかつた。

外へ出てシャンゼリゼーの並樹の下のベンチでパンフレットを讀むときにはそんな小競合のことは忘れようとしてゐた。あの賣店は賣れさうもないから退屈するだらうと同情の念が湧いた。パンフレットにセルジエスク教授の紹介が書いてある。著書もあげて

ある。これは有難い。実はこれまでに教授のことを余りよく知らなかつたのだ。ダルソンヴァールの本のページを切つて少しばらばらとやつてみる。

アンヴァリッドのエア・ステーションを見届けておく必要があるので、せつきイタリア領事館からアメリカ大使館へ行く途中で見ておいた。出発は河岸に面した方である。このあひだ飛行場から着いた日にタクシーへ乗つた所は南側の寺院に面した方であつた。出発の方の階段を下りたところが汽車の驛でヴェルサイユへ二十四分と書いてある。明日天気がよかつたらヴェルサイユへ行つてみようと思ふ。

シャンゼリゼーを歩いてゐたらブロード・ウェーといふ映画館があつて、ルネ・クレールの「ラ・ボーテ・デュ・ディアブル」といふのがかかつてゐる。ミシェル・モルガンが出てゐるさうだ。英語のタイトルつきと書いてある。今週が最後とあるから見ようかと思つたが少し疲れたからやめた。美しいアレクサンドル三世橋を渡つて宿へ歸る。